

---

# かいじんにじゅうめんさう

一二三四

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かいじんにじゅめんさつ

### 【コード】

N3535E

### 【作者名】

一二三四

### 【あらすじ】

私とM君の物語にもならない小話。

(前書き)

息抜きがてら執筆しました。深く考えて深みにはまってくれたら幸いです。グロというか、気持ち悪い表現の練習みたいな感じですか。全然大したことありません。

【かいじんにじゅうめんそう】

顔がなかったから悲しかったのか、悲しいから顔がなかったのかは今となっては何も私にとって生産的ではないのです。

「ただ一つだけ言えることは」なんて勝者の理論なのですが、勝者は敗者にそれを当然のごとく求めることは、大多数の方なら分かってくれると私は確信しております。

ですから次の話は大多数の皆様へ向けたメッセージであるとともに、私の薄っぺらな半生なのでございます。

昭和は今現在まで平べったく長く続き、まだ終わる兆しささえ見せていませんでした。

私が生まれたのはその二十余年前で、その当時から私は奇異の目で見られ、育ってきました。最初のうちは何がおかしくて私を避けるのだろうと考えておりましたから、嫌がる彼らを無心で追い回していました。

しかしそれも小学校三年生の時までの話で、三年生になったとき初めて友達と呼べる一人の少年と出会いました。その少年　　ここでは仮にM君としておきましょうか　　はこの町に引っ越してきた転校生でした。それも、普通の転校生ではなく、工場が乱立する古びたこの町に、彼はサーカスの団長の息子としてやって来たのです。

M君は転校初日の自己紹介で、日本全国を転々とするから、友達になっても直ぐに引っ越してしまうかもしれない、という内容の話をしました。彼は何度もこういう事を体験しているのか、小学校三年生とは思えない人生に疲れた気怠そうな表情をしていました。

私はその自己紹介と、クラスのどこを見渡してもそんな表情をする級友はいなかったものですから、一変に彼のことを気に入ってしまいました。

一時間目が終わり、十分間の休憩に入ります。級友は転校生のことを私と同じような奇異の目で見て、誰も話しかけようとしませんでした。あの学級一騒がしいS君でさえも、彼に話しかけるようなことはしませんでした。

その事が私にはとてつもない空前絶後のチャンスだと思いましたから、早速M君の席に近寄り、話しかけることにしました。彼は一番窓側の席で、そこから校庭の様子を見ているような、雲の流れを見ているような、どこか判然としない雰囲気を漂わせておりました。「あの、」

恐らく私はこんな事を口走ったのだと思います。なにせこれまでにない程の緊張が、私の全身を支配していたものですから、何を言ったかさえ恥ずかしながらはつきりとは思いつき出せないのです。

「……何？」

しかし彼の一挙一動は、私にとって一番重要な事でしたから、全てはつきりと覚えていきます。

「悲しくないの？」

「悲しいなんて、何で君に心配されるのかが分からない。もしかして、自己紹介の言葉からそう考えたのかな？」

ずいぶんと大人びた口調でした。予想通りというか、予定調和とつか。やはり彼は他の人とは違った何かを持っているとその時確信しました。それはある種私に非常に近いもので、しかし、月並みな表現ですか、私のそれとは性質をずいぶんと異にしているという印象。浮遊しているのに地に足が付いているというのが、彼を形容するに相応しい唯一の言葉であります。

「ああそうか、君は顔が無いのだから、そういう結論に至ったわけだ。あまりにも自然すぎて、気がつかなかったよ」

彼は微笑み、一枚のチケットを私に差し出しました。薄く黄色に

黄ばんでいる、ややもすれば汚いと思われる色合いのチケットが、私には楽園への小切手のように思えました。

「場所は分かっているね？ 来るか来ないかは君の自由だ。だけど、他人に渡しちゃいけないよ」

耳打ちをするため彼の顔が私の耳に近づき、吐息が耳や肩を撫でました。くすぐったくて、でも悪い気はしなくて。心地よいという言葉が一番しっくりくるのだと、私はその時思いました。

いつの間にチャイムが鳴り、二時間目の始まりを告げていることなど気がつかなかったのも、一重に彼のせいだと私はただただ感じておりました。

もちろんその日の夜の八時に、私はサーカスのテントがある町外れに行きました。

テントはあまり大きくなく、集まっている人全員が大人で、私だけ場違いな感じがして大変恥ずかしかったことを覚えております。

テントの中に入ると、ピエロの格好をした体が二メートルは優にあるだろうという巨大な男の人が、チケットの確認作業をしておりました。私は少したじろいでしまいましたが、彼もまた私の顔を見ると、少したじろぎました。これでおあいこという訳ではありませんが、私と巨人は同時に笑っていました。その時、何かこの人はM君と同じ感じがすると思いましたが、テントの中へ足を踏み入れる毎にその感覚はますます強くなっていくのでした。

私はその巨人に一番前の観客席に案内され、特等席だと座る間際に耳打ちをされました。子供を喜ばせるための方便だと思いましたが、実際一番前は特等席だと思っていたので、それも特に気にならず、始まるのを今か今かと待っておりまして。

そうして少し待っていると、いきなり照明が全て消え、舞台の中心にスポットライトが集中しました。見るとそこにはM君と、若く

日本美人を体現したような和服姿の綺麗な女性が立っており、そこで客席は一気に沸き立ちました。まだ、ショーは始まっていないというのにです。

異様な熱気といったら、演目の説明が掻き消される程の歓声から皆さんも想像できるでしょう。

M君と若い女性はテントの裏へ下がり、入れ替わりに先ほど席へ案内してくれた、巨人が現れました。相変わらずピエロの格好をしていましたが、心なしか大きさが増しているようです。

地響きにも似た太鼓のような、原住民が叩く楽器のような、お腹に響く音が流れ出し、その音に合わせてみるうちに巨人はさらに大きくなっていきます。ついには少し屈まないと天井を突き破ってしまうほどの高さまで大きくなり、そこで再びどつと歓声が沸き起こりました。

次に甲高い何か私には判別できない楽器の音が聞こえ、巨人はみるみるうちに縮んでしまい、最後は一番前の席であるにも関わらず、見えなくなってしまうました。

ここで顔のない私が、何故、物を見ることが出来るのかという疑問がわき上がって破裂しそうになっておられるかもしれませんが、それは私にも分からないのです。

巨人の次に出てきたのは首がキリンのように長い坊主頭の僧侶で、なぜ僧侶か分かったかといえますと、袈裟を着ていたからなのです。彼もまた一通り太鼓の音が鳴り、次いで甲高い音色が聞こえた後、テントの裏へと引っ込みました。この音が一つのサイクルになっているのだらうとは容易に想像できました。

次は足が三本ある老婆で、その次は頭の後ろにももう一つ目のある青年。スラリと長い日本刀を飲み込む中年男性もいましたし、顔面が金槌よりも硬く、叩いていた金槌がついに壊れてしまう少女もいました。

ここまで来るとこれがサーカスでも何でもなく、違法な、見つければ直ちに捕まってしまうであろう見せ物小屋であることは一目瞭

然でした。しかし、私は何故か抜け出して逃げてしまおうなんていう気は全く起らず、逆に逃げてしまえばM君にとって最大の無礼だと思い、最後まで見ることにしました。心の底で、M君がいつ、見せ物として登場するか気になっていいる私がいのだと思います。

さて見せ物も佳境に入り、観客達の熱気は何か室の違う物に変わるの、私にも肌で感じる事が出来ました。

最後の見せ物というアナウンスが流れ、観客達の熱気はいよいよおかしな物になりました。観客達をよくよく見ると、女性はおらず、男性ばかりであると気づいたのもこの時です。

最後の見せ物は、M君とその隣にいた綺麗な女性でした。案の定という言葉が脳裏をかすめました。この後に続くおぞましい光景は、小学校三年生だった私には想像など出来るはずありませんでした。

一段高いところに作られていた観客席に座っていた観客が、太鼓の音と同時に客席を立ち、M君とその若く綺麗な女性めがけて走り出しました。テントが壊れてしまうのではないかという程の地響きが、太鼓の音を掻き消します。

一番先に駆けだした男が女性に到達して、その服を無理矢理剥ぎ取られ、押し倒される所まで刻銘に思い出せるのですが、その後は朧気な映像と、妙に鮮明なあえぎ声だけしか頭で再生することしか出来ません。記憶がはつきりしたときには、既に男達が行方を終えた後で、恍惚とした表情のM君と女性が、股を開いて座り込んでいた所でした。私は反吐を必至に堪えてM君を直視します。これが私に課せられた使命だと、なぜかその時確信していたのです。

立ち上がるM君と、みるみるうちに腹が膨れていく女性。女性は再びあえぎ声を上げると、女性の股から何かが這い出してきました。無論、それは赤ん坊なのですが、赤ん坊には何故だか顔が無く、私にそっくりだと思いました。



あの日、女性が子供を産み続けていなかったら私は少し語弊があります。普通の生活を送れたでしょう。しかし、現実には座長となつて、終わらない演目を繰り返すだけなのです。

(後書き)

何か感じる物があれば感想下さい。罵倒歓迎。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3535e/>

---

かいじんにじゅうめんさう

2010年10月8日15時59分発行